

現代
好色
一代
女
田
文子

現代好色一代女・田地文子

講談社版

現代好色一代女

昭和三八年七月二〇日第一刷発行

著者 円地文子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町三丁目一九番地

電話東京(九四二)三一一一(大代表)

振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 横田製本株式会社

定価 三四〇円

著者との了解により検印廃止 ©円地文子 一九六三

目次

調停室にて……………	七
姫宮づき……………	一四
閨の戒しめ……………	二一
踏絵……………	二七
花のある家……………	三四
準青年……………	四〇
交換条件……………	四七
雪あかり……………	五三
怪我……………	五九
青い果実……………	六六
特攻隊……………	七三

二	う	愛	帰	女	母	新	船	色	芙	艶	鎌	一	初
疋	わ		朝	の	娘	し		あ	蓉		倉	月	恋
の	ご		の	復	地	い		る	夫		の	妻	人
蝮	と	妻	夜	讐	獄	ひ	出	毒	人	霧	海	妻	人
.....	と
一	六	〇	三	六	〇	三	七	一	五	八	二	五	八

家出	一六七
隠れ家	一七三
闖入者	一七九
迷路	一八五
ある新婚旅行	一九一
離婚まで	一九七
幾山河の果て	二〇三
夕焼雲	二〇九
救出作業	二一五
転心	二二一
母の秘密	二三七
弥勒菩薩	二三三
地獄の幸福	二三九
元旦雪	二四五

装帧
高沢
圭一

現代好色一代女

調停室にて

一

東京家庭裁判所……といつても現在の築地小田原町の陸軍経理学校跡ではない。今から三年前の昭和三十四年、初夏のことであるから、家裁は霞が関の厚生省の手前、少年審判所の前に当る場所にあつた。

外には五月の太陽が、街路樹の若みどりの房を一層明るく燃え上らせ、近くの日比谷音楽堂では来朝中のフランスの名ピアノリストの指先きから弾き出される微妙な楽音に満員の聴衆は快く酔い痴れて、輪舞しているような情緒に浸っていたが、家裁の二階の廊下に調停の時間を待って、ベンチに腰かけている人々の顔は、病院の待合室と似たりよつたりのとどこかに重たい凝りを沈ませている表情だつた。

書類を抱えた中年の男女が急ぎ足にベンチの前を横切つて並んだ扉の一つへ吸いこまれて行く。家庭裁判は家事審判官の判事を中にして、男と女各一人ずつの調停員

で事件を審いて行くのが定例なので、調停室には必ず、夫婦者と間違ひそうな同年配のカップルが入つて行くのである。

「女の調停員の方達は和服が多いわね。ほんとうに家庭の奥さんという感じね……その方が家庭裁判にはいいのかしらねえ……」

北側の壁の隅に押しつけられたように腰かけているほつそりした撫で肩の中年婦人が低い声でつぶやいた。彼女の隣に少し間を置いて、腰を降ろしている薄地の空色のスィーツを着た若い女と、顔立ちのよく似ているところから見ると、多分この二人の關係は母子か年の違ふ姉妹であらう。

母親にしてはいくらか年が若すぎるように見える初老の婦人が、ここちもち下り気味のゆつたりした二重瞼とゆるみ加減の口もとで、色白の軟かい顔立ちがひどく上品に見えるのに較べて、洋装の若い女は骨格はそっくりなのに、眼にも唇にもきりりと引き緊つた張りがあつて、その緊張感の間に一種の淋しさが一へら、殺ぎとつたように薄い頬のあたりに漂つていた。

「お母さんもいよいよあんたと一緒にいられないようになつたら、誰れかにお頼みして調停員にでもなろうかしら……」

母親は顔を背向けたまま、自分のつぶやきを聞き流し

ている娘の関心を惹こうとするように言った。

「調停員にお母さまがおなりになるの……」

娘の薄い頬にはあざけるような笑いが泛んだが、憂いを畳みこんだ濃い瞳の色がその冷笑を、泣き笑いのような悲しげな表情に変えた。

「それは打ってつけの役割かも知れないわ。お母さまなら、どんなこんぐらかった離婚話でも、養子縁組の破綻でも、きつと当事者に対しての同情が誰れよりも深いでしょうからね」

「ゆかりさん……何を言うの……あんたは生みの母親を嘲弄して笑っているのね」

母親の眼は、コンタクトレンズをはめこんだようにふくらみ、涙ぐんでいた。

ゆかりはそれには答えなくて、又横を向いた。母親にこんな態度をとらなければならぬ自分がみじめであったが、ここで崩折れてしまったら最後、自分は再びあの腐った腸で満たされていくような耐えられない古沼にずるずる引き込まれて行くより道がないのだと思うと、どんな無慚さをも敢えて冒そうと心を固く引きしめるのである。

「二十七号室です。狭間ゆかりさん、お出で下さい」

その時インターホーンのアナウンスの声が上の方から聞えて来て、ゆかりは立上った。

母親は腰かけたままゆかりを見上げたが、言葉をかけようとはしなかった。

ゆかりは手にした小さい紙をもう一度見直してから、右手の方へ歩いて行き、二十七号とナンバーの記されてある狭い扉をあけた。

二

余り広くない長方形の部屋は玉子色の壁に囲まれていて突き当りの窓の向うには、巨大なウエディングケーキのような議事堂の建物の頭が青の濁った空に白く泛んでいた。二つの窓を背景にして、家事審判官の吉田判事の中に鶴見初子と、岸井亮一の二人の調停員がテーブルに並んでいる顔が光線を背負って、黒く眺められた。吉田判事も岸井も前こごみにテーブルに肘をついているのに、右側の鶴見初子だけが反り身に椅子に背をもたせているので、女の鶴見の居丈が高く見えた。

ゆかりが離婚を申請している相手……つまり夫の狭間岳夫は、三人の調停者に対しあった椅子に腰かけていたが、ゆかりが入って来て、自分から一つ間を置いた椅子をずらしながら、一礼したのに眼を向けようとはしなかった。

「さあ、お掛けになって下さい。ゆかりさん」

と鶴見初子が言った。この調停は狭間のすっぱかしに

よって一二度流れたこともあったが、もうこの前三回も行われているので、鶴見も岸井も、狭間も、ゆかり、それに参考人としてのゆかりの実母の衣笠よし乃にも、一度の面接で懇意になっていた。

「ねえ、ゆかりさん……今も狭間さんと話しあったのですけれども、御主人の方では相変らず離婚する意志がないと言われているので、私達もあなたの希望を認めて上げることが出来ないで弱っているところなんです。あなたの離婚申請の理由である性格の不一致ということも勿論、離婚の条件にはなりませんけれども、狭間さんに言わせると、それは必ずしも決定的なことではないと言っているので、御主人の意見によれば、自分は浦和高校時代に衣笠家へ姓は変えないまま、養子のような形で入ることに親類一同賛成の結果極った……そうしてそのころまだ小学校に上ったばかりのあなたと、先々は結婚させたいが、万一双方の意志で結婚が不可能な場合でも、財産の相続の資格は与えられ、その代りに衣笠末亡人、つまりあなたのお母さんの扶養はするという条件だったというのです。この点は前の調停の時に、あなたのお母さんからもうかがって、三人の話が一致していますから間違いありませんね」

「はい、その通りです」
鶴見初子の確かめるような言葉にゆかりは素直に肯い

た。

全く、その頃旧制高校に入ったばかりの狭間岳夫を母が準養子の形で家に入れ、ゆかりはその後狭間をずっと兄さんと呼んで来たことに間違いはない。

それは父の衣笠義則が統制会社の役員になって働きたため、持病の肺結核をこじらせ、療養所で死んだ次の年であるから、太平洋戦争がまだ緒戦の華やかな戦果の夢からさめ切らない昭和十七年のことだった。

「その後、狭間さんが、一度学徒出征で動員され、特攻隊にまで編入された時もお母さんは狭間さんの、生命をとりとめようと、一生懸命に奔走されたそうですが、狭間さんはそのお蔭かどうか無事に軍隊から帰って来て、あらためて、K大の医科へ入学し、卒業後には久里浜の国立病院に勤めていた間に、進駐軍の高級将校に気に入られて、アメリカの大学へ行く話がまとまった……その時にはあなたはまだ高校の生徒だったけれども、お母さんのよし乃さんが留学中に岳夫さんに女の間違いの起ることを怖れて、結婚式を挙げさせた……間違いありませんね」

「はい、そうです。間違いはありません」

「狭間さんにきくと、その当時のあなたは、十七歳でまだ身体も細く痩せていて、ほんとうの少女だった。狭間さんは、軍隊生活の間に、女も知っているのです、あなた

とその時結婚することは傷々しいようだったが、兎も角はじめからの約束になっていることなのでお母さんの望み通りにしたが、その後三年シカゴで生活して帰って来た後も、あなたの方には初めの時の恐怖感や羞恥感がコンプレックスになって見えて、夫婦らしく馴染んではくれない……高校だけでは学力に不足があると言つて、あなたは鎌倉から東京のS女子大学へ通いはじめた……狭間さんはその間、心の底ではあなたを愛しつづけて来たので、他の女に關係を持ったこともないし、いつかはあなたのコンプレックスがとれて、子供の生れるようなことになるだろうと思つて辛抱して来た。一つにはあなたと別れることは長い間自分達夫婦の為に多くの犠牲を払いつづけて来たお母さんを失望させることだとも思う……あなたには現在、恋人があつて、その男と一緒にになりたい為に、色々自分を批難する材料を持ち出して来ているが、あなたの相手の男を自分は同性として信用することが出来ないから、あなたの将来を不幸にする離婚に賛成することは出来ない……そうしてあなたとしても近い将来には自分の真意が解つてくれるものと思つ……こういうのが御主人の意見です。ねえ狭間さん、話し方が下手ですが筋に間違いはありませんね」

鶴見初子は能弁に語りつづけたあと、ノートの上に、エパシャープの金色の鉛筆を軽く立てて、狭間の方を見

た。

狭間は男にしては稍々狭めの額際からぞっくり厚く盛上っている黒い髪をちよつと撫で上げるようにして、軽く頭を下げた。髪の毛や眉は濃いが、顔立ちは柔和に整つて、やさしげに見える。頬のたつぷりしているのや、テンプルの上に置いている手の指つ気なく白く軟かそうなのも、内科医という職掌にはまつているらしいと、調停員岸井は思った。しかしこの男の一見眠っているように見える二重瞼を長く横たえた眼には、男同志の間では判別し易い性格の特徴を全く見分けられない紗膜がはられている。あの眼が曲者だ、存外柔和そうな顔をして、財産のある女ばかりの一家を、この男はかきまわしている悪党かも知れないと、新聞記者上りの岸井は考えて見た。

「お話の通りです。前の時にも申しましたが、僕がゆかりを愛している気持ちに変わりはありません」

狭間はゆっくり落ちついた口ぶりで言つた。年はまだ三十三四であろうが、青年らしい無骨さはなくて、妻子を抱えている中年男のような分別ありげな話方である。

「僕が衣笠家へ来た当時、この人はまだほんとうの子供でした。先き先きこの小さい女の子と結婚するということは、お伽ばなしの中の王子にでもなつたようで滑稽だったので。戦争がすんで僕が大学に入つていた間も、

ゆかりについて、妹のような感じだったことは事実です。でもアメリカへいよいよ行くこと極つてからは、ゆかりをこのままにして行って、留守に誰れかに取られることは心配だったのです。性愛の感じが僕に起つて来たのはその頃からだったでしょう。そういう気持ちがある僕になければ、いくら母がすすめても僕は決して結婚しなかつたに違いありません」

「ちよつとお話中ですが……」

と岸井は狭間の言葉をさえぎつた。

「現代人を動かしている感情の根には勿論性愛が大きな役割を持っていますが、物質的なこともすべての事件の裏打ちになっていると思うんです。狭間さんがアメリカへ行く時、ゆかりさんと結婚して置こうと思われたのは、衣笠家の財産の相続者としてのゆかりさんを離したくない気持ちもあったのではありませんか。面子とか何とかを別にして、御自分の底の気持ちと話して頂くのがわれわれには一番ありがたいし、好感が持たれるのですがね」

岸井も狭間に劣らず静かな物言いで、微笑を頬に貼つけたまま、喋っているが、腹の中ではこの狸奴、娘もさることながら、昔は多額納税者だったという地方の素封家の衣笠家の財産に眼をつけていない筈はないと思つていた。

「ええ、僕も率直にお話するし、そういう風にきいて頂けることを望んでいます」

狭間は相変らず悠然とした態度を崩さずに言った。

「正直言つてよほど特種な技能のない限り、現代の医者には開業でもしなければ食つて行けません。その資金は衣笠家を出してくれると未亡人は言っていましたし、僕としても日本とアメリカと両方で学位もとっていますから、開業しても恐らく衣笠家の財産を失くしてしまうよりも、いい利廻りで運転して行けるとは思っています。もっともアメリカから帰つた時には、向うと協同出資になっている日製菓の顧問医になることに話が極つていましたから、衣笠家の財産を当てる必要はなかつたのですが……つまり、日本を出る時までには衣笠家の財産を僕の仕事に利用することに魅力を感じていたのは事実です。しかしそれだから、ゆかりと結婚したと言われると話は筋は違つて来ます。僕はもともと未亡人の老後を扶養するという条件で衣笠家の財産相続の権利を約束されていたのですから、ゆかりが愛せない女であつたら、無理に結婚する必要はなかつたわけですから」

「なるほど、それはそうに違いありませんね」

と岸井は言つた。

狭間の物語るのを、横から凝つと見ていて鶴見初子も、岸井の感じているのに似た曖昧なもどかしさを、狭

間という男に感じていた。

狭間に女出入りのいかかわしい行状のないことは調査によって、大方解っていた。彼の今話すことも筋は通っている。狭間は今になって、ゆかりが自分を嫌って離婚したいなどと言い出すのは、ここ一兩年親しくつき合っている建築技師の若い男に騙されているからで、その男こそ、ゆかりを餌にして衣笠家の財産をねらっていると自分は見ているから、ゆかりを離婚させずに置くことはゆかり母子の幸福を守る自分の義務感によっているのだと力説するのも、広義な愛情を持つ腹のある男らしく立派でもある。

しかし鶴見初子にしても岸井亮一にしても、この前一度参考人として呼んだゆかりの友人の建築技師の篠田竜彦をそんな悪意がある人間と見ない点で二人の意見は一致していた。

「どうですか。ゆかりさん……今の御主人の話であなたの意志が少しでも動くなら、われわれは喜んで、そういう方向に話を進めて行きますが……」

審判官の吉田判事がうつつ向いているゆかりの方へ顔を向けて言った。

顔を上げると、ゆかりは夫の話の間中、嚙みしめていたらしい唇が血を噴くほど赤く濡れて、臉のあたりも、涙の為ではない昂奮に赤らんでいた。

「私の考えはちっとも変わりません」

ゆかりは言葉だけでは足りないように、首を小さく振って言った。

「私は夫ともう一度一緒に生活しようとはゆめにも思いません。それは篠田さんに騙されたとかそそのかされたとかいうことは全く違います……」

そう言うてから、ゆかりはもう一度自分の前に居並んでいる三人の年長者の顔を不安そうに見まわした。

「私の意見が変わらないとすると、この調停はどうなるのでしょうか。私がこの人から離れることはどうしても出来ないのでしょうか。ああ、それは余りです。余りひどい話です」

ゆかりは両手で小さい頭を抱えこんで、今までの静かさとは違いすぎる荒い動作で、テーブルの上に向つ伏してしまつた。

「大分昂奮していますな」

と吉田判事が言った。

「お母さんを呼びますか」

「いいえ、ちょっとお待ちになって下さい」

鶴見初子が押しとめるように言った。

「私、ゆかりさんにもう少しきき度いことがありますの……判事さん、岸井さんも、狭間さんに一時部屋を出て頂くことに御賛成願えましょうか」

「私もその意見です」

と岸井がうなずきながら言った。

吉田判事は狭間に向つて、ちよつとの間廊下に出ていくようにと言つた。

「僕は実は四時に会社で人に逢う約束になつて居るのですが……」

狭間は逃げ腰に腕の時計を見ながら言つたが、吉田はほんの少しの時間ですむことだから待つて居るようにと言つて、彼を部屋の外へ出した。

三

「ゆかりさん……私はこの間から一つだけお聞きしたいことで、今まで遠慮していたことがあるのですが、どうも今日の模様では、あなたがその一番話しにくいことを口に出されない限りこの離婚は成立しないと思われるんですよ。そしてそのあなたが口に出れないことというのが実際にはあなたの離婚の根本原因なのではないのですか。ね、そうでしょう……口で言われなければうなずくだけでもいいんですよ。私の今訊くことに返事して下さいますか」

初子は立上つて来て、テーブルの上に頭を投げ出し、両手で顔を蔽つて居るゆかりの傍によつて、波打つて居る肩に手を置きながら言つた。

ゆかりの慄えていた髪や肩がびたりと静止して、一瞬、考えを極めようとする努力が呼吸をさえ止まらせたかと思える沈黙が部屋の中を籠めた。

ゆかりはゆっくり顔を上げ、夢から醒めたような瞳で空を見ながら手を上げて額に乱れる髪をかき上げた。

「先生、申しますわ……私……どうしても言うまいと思つて今まで我慢して来たのですけれど、離婚が成立しなければ私は狭間から解放されることは出来ない……私は地獄で死ぬのは厭なんです」

「ゆかりさん、間違つていたら御免なさい、あなたの隠していたのは狭間さんとあなたのお母さまの間のことではなかつたのですか」

「ええ、そうです」

ゆかりは生つばをのみこんで言つた。

「母は狭間を愛しています。私は二人の……ある瞬間をいく度も見ているんです」

もう一度狭間が調停室に一人で呼び込まれたあと、ほんの五分もかからないで、ゆかりとの間の離婚は成立した。

ゆかりは母と顔を合わせないままに、家裁の階段を駈降りて行つた。重量を失つたような軽い、……軽すぎる足取りであつた。

「やっぱりそうだったんですよ。私ははじめからそこが怪しいと睨んでいたけれども……こればかりはうっかり誘導訊問も出来ませんからね……可哀そうにあの娘さんは随分苦しんででしょうよ。悪くすると自殺騒ぎだつて起りますよ。ええ、ええ、苦しくても言つてしまふ方がいいんですとも……」

吉田判事を先きに手もとの書類をまとめて椅子から立上りながら、鶴見初子は溜飲の下つたように晴れ晴れした顔で岸井に言った。

姫宮づき

一

家庭裁判所を出たゆかりは、そのまま、東京駅へ行って、恰度発車直前の湘南電車に乗り込んだ。

二等の車内はいい工合に空いていて、窓際にゆっくり腰かけることが出来た。

ゆかりは潔癖らしく、塵紙で窓枠を拭いてから、空色

の七分袖からぬけ出た滑らかな手に片頬を支えて、窓に肘を突いた。何も考えていないような茫然とした瞳が、アドバルーンも一つ二つ泛んでいる繁華街の上のうす濁った空を見ている……。

とうとう私は狭間から解放されることが出来た……私は自由な身体になったのだ。……そう思つてみても翼を張つて大空に舞い立つような喜びはなく、鳥に例えれば、舞っている筈の翼に一箇所もちが濃くねばりついているような、羽ばたきにくさに心が苛ら立つのである。

狭間岳夫の妻でなくなったことはゆかりにとって喜ばしいことだったが、狭間と別れて、衣笠ゆかりに戻ったところで母親との縁は切れはしない。実は自分は狭間と別れるのと一緒に母との縁もふつり切つてしまいたいのだが、たかだか違つた土地へ行って、別居するか、母の財産の権利を放棄するぐらいがせいぜいで、肉親の親子が無縁になることは、現在の法律では不可能なのだということを、ゆかりは今度の家事裁判の派生知識として知ることが出来た。

狭間岳夫との離婚が成立すれば、結婚する約束になっている篠田竜彦は現在吉川建設会社の技術者の一人で、今は東京の現場に働いているが、仕事の性質上、九州や北海道へ行くことも多い。ゆかりは竜彦の勤めが、ここ数年